様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年 5 月 31 日現在

機関番号：34416
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2011
課題番号：22720146
研究課題名（和文）
『宋本杜工部集』を中心とした杜甫詩文集の書誌学的研究
研究課題名（英文）
"Philological Research on Du Fu 杜甫's poems and writings ...with a focus on *Songben Dugongbuji*《宋本杜工部集》"
研究代表者
長谷部　　剛　（HASEBE　TSUYOSHI）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：　50308152

研究成果の概要（和文）：
論文「唐代における杜甫詩集の集成と流伝（一）（二）（三）」において、「中唐期にすでに杜甫詩文集の定本が存在し広く流通していたとは考えにくい」と述べ、さらに論を進め、王洙本『杜工部集』と、幾つかの事例では明らかに唐鈔本の原貌を留めている『文苑英華』とが大きく異なる以上、中唐期から『文苑英華』までのあいだに、王洙本『杜工部集』と変わらない完全さを備えた杜甫詩文集のテキストが編集されていたと想定することも難しくなると推測した。
これらの研究成果に基づき、先行研究がその存在を推測する、「北宋の王洙が編集する以前、すでにその（引用者注、杜甫の）全生涯の作品を網羅した」杜甫の詩文集は、仮に存在していたとしても、古体詩三九十首、近体詩一千六首を収める王洙本『杜工部集』のごとき全きものではなかったと判断した。杜甫が没した直後に編集され二百九十篇の杜詩を収める樊晃『杜工部集小集』は杜甫の全生涯の作品を網羅しているが、安禄山の乱が勃発後から四川に流寓した時期にかけての作品が多く、それに次いで最晩年の湖南漂泊期の作品が多く収められる一方、安禄山の乱勃発前の作品と夔州時代の作品が少ないなど、収録される杜詩は制作時期によって偏在している。『文苑英華』所収の杜詩もそれに似た傾向を示している。『文苑英華』もまた『杜工部集小集』『唐詩類選』と同じく、部分的に収集されて成立した、おのおの独立した複数の杜甫詩文集を参照していた可能性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：

Wang Zhu 王洙 wrote the postscript in 1039(“寶元二年”),but *Du gong bu ji* 杜工部集 compiled by him seems not to have been printed. Therefore, This text doesn't exist.

It is Wang Qi 王琪 (dates unknown) ,who was a governer of Suzhou 蘇州 province, who printed Wang Zhu's *Du gong bu ji* 杜工部集. According to Wang Qi's postscript, he obtained Wang Zhu's text through the intermediation of his friends and revised it with the assistance of one of them. He printed it in 1059(“嘉祐 4 年”). However, this *Du gong bu ji* 杜工部集 which was compiled by Wang Zhu and printed by Wang Qi doesn't completely exist in its entirety. We can only see it partially in *Song ben Du gong bu ji* 宋本杜工部集 which is in the possession of the Shanghai Library. The structure of *Song ben Du gong bu ji* 宋本杜工部集 is so complicated that we must explain it in detail. The text was originally owned by Mao Yi 毛扆(1639～?).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：杜甫詩文集　『宋本杜工部集』　書誌学

１．研究開始当初の背景

中国文学で中心的位置を占める「詩文」のジャンルにおいて、「詩」は唐代(618～907)に最も隆盛し、その「唐詩」のなかでも杜甫(712～770)の詩は「唐詩の最高峰」として揺るぎない評価を得ている。

杜甫の詩は「唐詩の最高峰」としての位置にありながらも、そのテクストは、後に詳述するように、後代になって編纂されたものであり、杜甫自身、および杜甫の同時代のテクストではない。上海図書館が所蔵する、現存最古のテクストは『宋本杜工部集』と通称され、全 20 巻 1405 首の杜甫の詩を収めるが、六十巻あったとされる杜甫の詩文集の何分の一かを留めるに過ぎない。

さらに、この『宋本杜工部集』は、北宋の時代、1039 年に王洙が編纂し王琪がさらに補って刊行した『杜工部集』を南宋前期に翻刻した、という複雑なものであり、さらに欠損部分は上海図書館本とは系統を同じくする北京図書館本を影印して補っている。

このように、杜甫の時代から 300 年以上隔たった『宋本杜工部集』からは、杜甫の詩の原貌を窺うことは全く不可能であるが、北宋から南宋の時代にかけて可能な限り杜甫の詩文集を復元しようとしたテキストがこれしかない以上、この『宋本杜工部集』を最重要テクストと見なして杜甫の詩文を解読・研究するしかないのが現状である。

その一方で、『宋本杜工部集』の書誌学的研究は、中国国内においても日本の学会においても必ずしも全面的には行われていなかった。換言すれば、ただ『宋本杜工部集』を最重要テクストと見なして盲信的にこれに従ってきただけであった。

２．研究の目的

「北宋から南宋の時代にかけて可能な限り杜甫の詩文集を復元しようとしたテキストがこれ(『宋本杜工部集』)しかない以上、この『宋本杜工部集』を最重要テクストと見なして杜甫の詩文を解読・研究するしかない」現状に対して、新たな研究手法を確立しようとした。

３．研究の方法

唐代に流伝していた杜甫の詩の異文、および『文苑英華』所収の杜甫の詩の分析をおこなった。唐・顧陶『唐詩類選』などで確認できる、唐代に流伝していた杜甫の詩について、現行の杜甫の詩集と異同がないか、検討し、それをさらに『文苑英華』所収のテクストと比較・分析し、唐代から北宋代にかけての杜甫詩集テクスト編纂過程を通時的に解明した。

４．研究成果

論文「唐代における杜甫詩集の集成と流伝（一）」において、樊晃『杜工部集小集』と顧陶『唐詩類選』を調査し唐代における杜甫詩集の集成と流伝状況について具体的な解明を試みた。その結果、樊晃『小集』と顧陶『唐詩類選』との比較してみると、以下の三点が明らかになった。①収録杜詩の制作時期についてはほぼ同じ傾向であるが、後者において夔州時代以降の作品の少なさが顕著であること、②樊晃「小集」では多い、杜甫最晩年の大暦四、五年、湖南での作品が、後者ではきわめて少ないこ顧陶による選別の対象（母

体）になっていた杜詩群自体にそもそも夔州時代以降の作品――とりわけ湖南での作品――が少なかった可能性がある。③収録杜詩の詩型については前者は杜甫の古体詩を重視し、後者は近体詩を重視している点ではっきりとした相違を示していること。

論文「唐代における杜甫詩集の集成と流伝（二）」において、まず注意したのは、前述の通り『文苑英華』には誤字などの疎漏が極めて多いことである。例えば、「憶昔行」では『宋本杜工部集』が「艮岑青輝慘么麽」とするのに対して『文苑英華』は「良岑青輝慘么麽」に作る。これは『文苑英華』が鈔本として伝写される際、あるいは刊刻される際に「艮」を「良」に書き誤ったものと考えられ、字形の相似から起こった誤り、いわゆる「魯魚の誤り」である。実際に、宋鈔本を影写した明鈔本「舊鈔本」では「艮」に作っている。従って『文苑英華』編纂の際には「艮」に作っていたと考えられ、『文苑英華』明隆慶刊本の明らかな誤記と判断できる。もう一例。「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」では『宋本杜工部集』が「自是君身有仙骨」とするのに対して『文苑英華』は「自是君身有仙谷」に作る。これは「骨」を同音の「谷」で筆写したものと考えられ、同音異字の誤りである。「舊鈔本」では「骨」に作っているのでこれもまた『文苑英華』明隆慶刊本の明らかな誤記と判断できる。

文苑英華』の誤りを除外して、『文苑英華』所収の杜甫詩と杜甫と唱和した他詩人の作品、計二六二首について、『宋本杜工部集』との異同を調査し、全く異文のないものはわずか詩二十三首に止まり、それ以外の二三九首すべてに異文が見られること、その二三九首のうち、個々の句において異文が確認できるのは七二七箇所にのぼることを指摘し、この数の多さから、北宋期の『文苑英華』と王洙本『杜工部集』では底本とする杜甫詩文集テキストが異なる、と結論した。

さらに論文「唐代における杜甫詩集の集成と流伝（三）」で「中唐期にすでに杜甫詩文集の定本が存在し広く流通していたとは考えにくい」と述べ、さらに論を進め、王洙本『杜工部集』と、幾つかの事例では明らかに唐鈔本の原貌を留めている『文苑英華』とが大きく異なる以上、中唐期から『文苑英華』までのあいだに、王洙本『杜工部集』と変わらない完全さを備えた杜甫詩文集のテキストが編集されていたと想定することも難しくなると推測した。

これらの研究成果に基づき、先行研究がその存在を推測する、「北宋の王洙が編集する以前、すでにその（引用者注、杜甫の）全生涯の作品を網羅した」杜甫の詩文集は、仮に存在していたとしても、古体詩三九十首、近体詩一千六首を収める王洙本『杜工部集』のごとき全きものではなかったと判断した。杜甫が没した直後に編集され二百九十篇の杜詩を収める樊晃『杜工部集小集』は杜甫の全生涯の作品を網羅しているが、安禄山の乱が勃発後から四川に流寓した時期にかけての作品が多く、それに次いで最晩年の湖南漂泊期の作品が多く収められる一方、安禄山の乱勃発前の作品と夔州時代の作品が少ないなど、収録される杜詩は制作時期によって偏在している。『文苑英華』所収の杜詩もそれに似た傾向を示している。『文苑英華』もまた『杜工部集小集』『唐詩類選』と同じく、部分的に収集されて成立した、おのおの独立した複数の杜甫詩文集を参照していた可能性を指摘した。

本研究では、さらに、以下に掲げる三点については、十分な資料や論拠を持ち合わせないために未解明のままとして残った。

１．『杜工部集小集』の序文において編者樊晃は、彼のまだ見ぬ杜集六十巻が「江漢之南（長江と漢水流域の南）」で流行していたと記している。この「六十巻」という大部の杜集はその後、全く継承されることなく散逸したのか、それとも散逸の過程で分解されその一部が杜集残巻としてのこり、後代の杜甫詩文集に吸収されているのか。

２．六十巻の杜甫集が流行していた「江漢之南」と、杜甫の二子、宗文・宗武が流遇していた「江陵（現在の湖北省荊沙市一帯）」は地理的にほぼ一致するから、この杜集は宗文・宗武のもとから出たものと考えられる。元稹（七七九～八三一）が元和八（八一三）年、江陵府の士曹參軍であったとき、杜甫の孫、杜宗武の子である杜嗣業が、江陵にあった祖父の棺を開いて偃師（現在の河南省偃師市）にある杜家の墓地に改葬するために江陵に至り、元稹に墓誌銘の制作を求める。その「唐故工部員外郎杜君墓係銘」では、杜家と杜甫詩文集との関係に言及することはなく、むしろ

予嘗欲條析其文、體別相附、與來者爲之准、特病懶未就。

予 嘗て其の文を條析し、體別に相

ひ附し、來者のために之れが准を爲さんと欲するも、特だ懶を病みて未だ就さざるのみ。（傍点、引用者）

と述べる。かつて杜甫の詩文を詩体・文体別に編集しようとする意欲を持っていたということは、元稹は杜嗣業に会う以前にすでに杜甫詩文集を所有・閲覧していたことを意味していよう。江陵、あるいは杜家と深い関わりを持つはずの六十巻本に言及せず、元稹自身が以前より杜集を所蔵していることを暗示しているので、前者が元稹・杜嗣業の時代に散逸していたとも考えられるが、確証はない。

３．　白居易（七七二～八四六）が元和十（八一五）年親友の元稹に送った「與元九書」のなかで「杜詩最多、可傳者千餘篇」と述べており、この時点で伝わっていた杜詩が「千余篇」であったことがわかる。この数は、古体詩三九十首、近体詩一千六首を収める王洙本『杜工部集』に近くなっており、このことから黒川洋一「中唐より北宋末に至る杜詩の發見について」は「白居易はこのとき杜甫の全集を讀んでいたのではないかと思われる」と推測する。しかしながら、白居易の言う「千餘篇」が王洙本『杜工部集』が収める詩篇にほぼ一致しており、中唐、白居易の時代にすでに王洙本『杜工部集』に接近した杜甫の全集が存在していたことを証明する根拠はない。ただ「千餘篇」という数字からそのように推測できるに過ぎない。もし存在していたならば、白居易の五十年後、大中十（八五六）年に顧陶が『唐詩類選』を撰する際にも参考にされたはずであるが、それが認められないことを本稿ですでに主張したとおりである。その一方で、白居易が所蔵していた杜詩「千餘篇」の詳細については未詳である。

これらの問題については、今後、新資料の発見を期待するだけでなく、北宋、王洙『杜工部集』以前の杜甫詩文の受容・流通を解明するための、新たなアプローチを模索しなければならないことがわかった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①長谷部剛、王昌齢「一片冰心在玉壺」誕生の背景、単著、『関西大学中国文学会紀要』、査読有、第 33 号、pp. 1-17（2012 年 3 月）

②長谷部剛、唐代における杜甫詩集の集成と流伝（三）、単著、『関西大学文学論集』、査読無、第 61 巻第 4 号、pp. 49-84（2012 年 2 月）

③長谷部剛、唐代における杜甫詩集の集成と流伝（二）、単著、『関西大学文学論集』、査読無、第 61 巻第 3 号、29-93 頁（2011 年 12 月）

④長谷部剛、唐代における杜甫詩集の集成と流伝（一）、単著、『関西大学文学論集』、査読無、第 60 巻第 4 号、pp. 21-44（2011 年 2 月）

〔学会発表〕（計１件）

①長谷部剛、簡論從初盛唐至中唐「古樂府」概念的演變、単、中国唐代文学学会第 15 回年会及唐代文学国際学術研討会、2010 年 10 月 16 日、中国・南開大学

６．研究組織
(1)研究代表者
長谷部　剛（HASEBE TSUYOSHI）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：50308152

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：